

The Reminiscence of Exellia NG+1

祝福無き者

キャラクター作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：17500 点（新規）、19000 点（継続）
- ・ 資金：21500G（新規）、24500G（継続）
- ・ 名誉点：500 点
- ・ 成長回数：25 回

各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ ソード・ワールド 2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化禁止
- ・ 《武器習熟 A / 盾》《武器習熟 S / 盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・ レベル制限 4～5
- ・ 成長回数が 10 以上のときに、その成長回数の 50% 以上の偏重割り振り（極振り）禁止

導入

謎の男

「——剣の加護が失われてから 200 年。

我らは、その執念の果てに『次元を超える力』を手にした。数多の人々の犠牲の果てに、我らは世界から『剣の加護』を奪う術を生み出した。

我らのことを『祝福無き者』と呼ぶが、むしろないが故に我らは強みを得た。

無限に並ぶ並行世界から、祝福を奪って終わらせてやる。そのために、我らは星の記録者の性質を利用する。世界よ、我らに恐れ戦け。そして平伏しろ。貴様らが見捨てた、祝福を失い腐敗した世界に」

玉座の周囲が暗いその場所で、彼はそう言った。

彼らがふと見上げると、そこには黄金色に染まり、死滅したラクシアがあった。

彼の名は、ジャック・ニコラス・トニトルス。

祝福無き者の首魁にして、此度の騒動の主犯である。

J・ニコラス

「星の記録者…貴様の意志がどうであれ、我らはお前達から祝福を奪う。

記録者よ、己の功罪にもがき苦しめ。永遠に」

<hr>

———一方その頃。

『財団』は、ブルーアウト樹海を超えた先、ダジボス山嶺で眠る「それ」を見て、己の計画が進んでいることを密かに喜んでいた。

財団

『無限に世界を繰り返した貴女の功罪が、その身に蓄積しているのですよ。抗い、逃れようとしたところで、その事実は変わらない。フフフ、我々の計画に、貴女は組み込まれているのですから、我々の思うとおりに動いてもらわなければ』

「それ」…かつてリーンを貫いた獣は、世界の破壊への指向性を与えられた己に対し、まるで言い聞かせるかのように、魔法を発動して、己を封じることで、己の破壊衝動に抗っていた。

財団

『抗わず、ただ己の破壊衝動に従えばいいのです。終わりを滅ぼしたいのでしょうか？』

甘美な言葉で、獣に語りかける『財団』。しかし獣は、微かに戻り始めた自我で、『財団』に対して言葉を発する。

エクセリア

『…私に…命令でき…るのは…、私…だけ…だ…！』

<hr>

君達が、『三柱の蛮神の試練』を超えてから、3週間。

エメリーヌが、3週間ぶりに依頼書をクエストボードに貼り付けた。

エメリーヌ

「…《佳麗なる落し子》からの依頼…。とすれば、やはり『祝福無き者』が現れた、ということかしら」

エメリーヌは君達を呼び止めて、依頼を見せる。

エメリーヌ

「急に呼び止めてすまないね。3 週間、療養期間を設けたけど、傷は治ったかな」

(※GM メモ : RP 待機)

エメリーヌ

「じゃあ、依頼の内容を雑に言うわ。…新たな『祝福無き者』を倒せ、とのことよ」

(※GM メモ : RP 待機)

依頼の詳細は、この後示すことになる。

依頼「宝瓶の褪せ人」

・依頼主：イリヤスフィール・ゼーゲブレヒト

・依頼概要：十二席の『祝福無き者』の撃破

・依頼要項：

君達が 1 回、『祝福無き者』を討ち倒したという噂は聞いているよ。

だからこそ、今回の依頼を出すことにしたんだ。ダジボス山嶺の麓に出現した『祝福無き者』の討伐を、お願いできるかな。

・報酬：2500G

・前金：500G

三者三様の反応を見て

(※GM メモ : RP 待機)

エメリーヌ

「ただでさえ、ただ事ではない戦場に、初っ端から放り込まれているのに、『何を言っているんだお前は』って表情をしてるわね…。

でも、イリヤの分析から、ある程度『彼ら』の指向性が見えたのよ。

それと、もう一つ。『十四座の祝福無き者は未だその宿業に抗っている』、という知らせも聞いたわ」

PC への選択肢

- ・十四座の祝福無き者？
- ・それってまさか…。

エメリーヌ

「多分、エクセリアのことよ。

彼女、よく裏の事情を隠す上に、問い詰めたら『私が語れる事情があると思うか？』と返してたのを思い出した。その上で、彼女が『十四座の祝福無き者』なのではないかと考えたわ」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、いずれにせよ『宝瓶の褪せ人』について調べる必要があるようだ。

聞き込みと分析 Phase 1

君達は、聞き込み判定をする必要がある。

聞き込み判定の場所

- ・フレイディア
- ・古竜の頂
- ・トルガワ港（別途イベント発生）

フレイディア

聞き込み（冒険者+知力またはセージ知識）判定 目標値：14

成功時、以下の会話を聞くことになる。（セージで成功した場合は**赤文字の情報**も得ることができる）

市民

「…《暗魂の暁》はまだ動いてるんだな。龍姫公を倒さねえと、俺達に未来はないっていうのになあ。

「だったら、俺達は、今を変えるために『ニコラス』に賭けるさ」
「『ニコラス』様は私達を新たな世界に導いてくれると約束してくれました。だから、あなた達がどのように足掻こうが、やるだけ無駄なんだよ」
「…まさか、『ニコラス』様さえも知らないのか？いや、流石に笑えねぇよ若造。『ニコラス』様は、祝福を持つ俺達が祝福を渡す対価として、新たな世界に導いてくれる救世主なんだよ」

古竜の頂

聞き込み（冒険者+知力またはセージ知識）判定 目標値：14
成功時、以下の会話を聞くことになる。（セージで成功した場合は**赤文字の情報**も得ることができる）

無名の王

「…確か、宝瓶宮に関連のある存在だったな。奴は水を手繰る『祝福無き者』だ」
テラージャ
「彼らの侵攻は、あなたにとっても想定外の範囲外でしたよね？」

無名の王

「…ああ、そうだ。彼らが一体、どうして侵攻するに至ったのか、侵攻するべきと考えたのか…。それを証明する存在、星の記録者たるエクセリアが、『財団』によって暴走状態に至っている以上、俺達が語れる話が少ない…」
「だが、彼らが計画的に侵攻していること自体は分かる…。一体、誰に率いられていると言うんだ」

フレイディア赤字データ回収時にセージ知識を成功させた場合

無名の王

「なっ…、祝福を渡す対価で世界を救うだと！？そんな突拍子もないことが通用すると、本当にその市民は思っているのか！？」
テラージャ
「『祝福無き者』は、祝福…すなわち、カルディアのエーテルであるマナをはじめとした『始まりの剣の祝福』を失っている。だから、彼らは侵攻する。その先に、己の未来を勝ち取るために」

トルガワ港へ

君達は、トルガワ港へと向かうべく、馬車に乗った。

乗り合わせたグラスランナーの男が、ぶつぶつと喋っている。

グラスランナーの男

「…最近の『祝福無き者』の騒動はなにかと不審な点が多いな…。エクセリアの暴走の件といい、この件といい…、『財団』と奴等が組んでいるようにしか思えない」

(※GMメモ：RP待機)

グラスランナーの男

「お、お前等は暗魂の暁の新米じゃねえか。俺を見てどう思うんだ。俺だって、カルディアのエーテルなんてマトモには使えねえ。今、巷で騒ぎを起こしている『祝福無き者』と同じってことだ」

(※GMメモ：RP待機)

グラスランナーの男

「俺だって、俺自身の望みで故郷から転移装置で渡ってきたわけじゃねえ。
あいつらの場合、『欲張り』としか言えねえ」

そうこうしている内に、馬車が止まる。

(※GMメモ：RP待機)

グラスランナーの男

「…トルガワ港に着くには早すぎる…。何かあったのか？」

馬車の御者

「ば、蛮族だあ！」

そこへ、にゅるっと、魔法人形サイズのアルテマが現れる。

アルテマ

「…警戒しろ冒険者…、『嫌な予感』がする」

君達が馬車の外へ出ると、そこには蛮族が確かにいた。

いや、確かにそれは蛮族なのだろう。

だが、君達の予想する「蛮族」とは少しかけ離れていた…。

アルテマ

「…おい、あの蛮族…。<ruby>神の兵<rt>アカシア</ruby>になったぞ…！」

敵：アカシック・ボルグ×4、アカシック・スター・ドラゴン×1

死した港

君達が脅威を退け、トルガワ港へ着くと、そこには異様な光景が広がっていた。

誰もいないのだ。

グラスランナーの男も、この光景には驚愕していた。

グラスランナーの男

「なんだ…、これは…。何故、こんなことになっている…？」

トルガワ港は、龍刻連邦の玄関口で…、龍刻連邦を支える貿易港の一つだったはずだぞ…！？」

その直後、グラスランナーの男が消失する。ここには、光の戦士やアルテマのような精神体でもないかぎりには突入できないのかもしれない。

君達は以下の判定を行うことができる。

- ・トルガワ港全体に対する探索判定（スカウト or レンジャー観察）
- ・トルガワ港の建物に対する聞き耳判定（スカウト観察）
- ・トルガワ港の港湾設備に対する探索判定（スカウト観察）
- ・トルガワ港の街に対する探索判定（スカウト or レンジャー観察）

トルガワ港全体探索

君達は港全体を探索した。

（※GMメモ：RP待機）

しかしなんの返事も返ってこなかった。

(※GMメモ：もう一度だけRPできる)

…やはり、返事はない。

この港町だけが、こんな状況なのだろうか？

(※GMメモ：探索判定成功者にフラグを1つ立てる)

トルガワ港の建物に対する聞き耳

君達はトルガワ港の中にある建物に対して聞き耳を行った。

…やはり、異様なまでに静かだった。

(※GMメモ：聞き耳判定成功者にフラグを2つ立てる)

トルガワ港の港湾設備に対する探索

君達はトルガワ港の港湾設備に対して変化がないか確認した。

トルガワ港にあるすべての設備が、今も尚使える状態で、まるでさっきまで人がいたのに、唐突に人が消失したかのようにいなくなっている。

(※GMメモ：探索判定成功者にフラグを2つ立てる)

トルガワ港の街に対する探索判定

君達はトルガワ港の街を歩き回った。昨日まで人がいたのだろう、そこにはごく普通の港町が広がっていた。人がいないことを除けば、そこは『ごく普通の港町』だ。

ふと、君達は街の中のリングに目をつけた。それを手に取ってみる。

…リングは急速に灰と化し、塵となって消え去った。

(※GMメモ：探索判定成功者にフラグを3つ立てる)

絶望の果て

君達はその凄惨な現実には打ちひしがれるだろう。

だが、悲鳴を上げるわけにも行かなかった。

本能的な恐怖に抗う必要がある。

精神抵抗力判定 目標値：15

成功時 2d+6、失敗時 2d+24 点の MP への確定ダメージを受ける。

『竜の姫』

????

「こんなところで何をしているのかな？」

(※GM メモ : RP 待機)

君達は、あまり聞き慣れない声を耳にするだろう。

振り返ると、やけに際どい服装の女性がいた。雰囲気は老練の女性だが、その外見は第 2 次性徴を終えた後の少女のそれであり、また顔にはエクセリアの面影を感じた。

龍姫公

「驚かせたかな。私はエクセリア・エーディン。フレイディアの人々からは『龍姫公』と呼ばれているよ」

そう言って、龍姫公は君達を尋問しようとする。

龍姫公

「君達が、なぜここにいるのか。アルテマにいわれから？それとも、これまでの騒動を聞きつけたから？それとも、単なる興味本位？」

(※GM メモ : RP 待機)

龍姫公

「君達がヴァルマーレと関わりを持っているのは知っているよ。それによって、君達が利を得ていることも、とある伝手から知っているんだ。だから、敢えて言わせてもらうよ。

ヴァルマーレと距離を取って欲しい。あの国は私達にとっての敵国で、未だ魔動機文明時代の物品によって栄えている国なのだから」

PC への選択肢

- ・ただ戦争がしたいだけなのではないのか？
- ・ヴァルマーレとの関わりを断つのが正しいとは言えない

龍姫公

「へえ。あくまでも、『ヴァルマーレと戦争した際のデメリット』に目をつけているんだ…。じゃあ、私が戦争目標としている『領有権問題』についてなにも言わないのかな？」

(※GMメモ：RP待機)

彼女が示した、『フレイディアとヴァルマーレの間で起きている領有権問題』に関して口にしだした瞬間、君達は強烈な目眩に見舞われるだろう。

フレイディアとヴァルマーレ、避けては通れぬ『確執』

目眩の向こうに見えた光景は、外交の場だった。

ヴァルマーレ外務大臣

「だから、魔法文明時代から諸島は我々の領土ですよ」

龍刻連邦外務大臣

「いいや、神紀文明時代から、その土地には我々の民族が住んでいた。よって、そこは我々龍刻連邦の領土だ」

過去に熾ったことであるが故に、干渉はできないが、君達はその場面に対して感想を述べることができるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

ヴァルマーレ海軍大臣

「それを示す証拠がないだろうが！いい加減、こちらの気持ちにもなってもらいたい！

あなた方の領海侵犯で、我々の国防費は悲惨なことになっている！最長で7週間も居座った例もある！威嚇射撃をしたら、報復射撃をしてくる始末で、毎度の領海侵犯で最低でも5隻は軍艦が沈んでいる！」

そう言うヴァルマーレの海軍大臣のもとへ、龍姫公が現れる。

龍姫公

「そもそもあそこは私達の領土だ。有史以前から、古フレイディア語で書かれた碑石が多数発掘されていると聞く。それが真実で、あなた方が語ることは幻想なのではないか？」

ヴァルマーレ海軍大臣

「だが、ザインウェアを含めたケルディオンの連盟において、あの諸島…新関諸島は我が国ヴァルマーレに属すると明言されているのだ！何故、それを知って尚領海侵犯をし続ける！」

龍姫公

「やはりジャパネーゼの人間は蛮族だな。…1ヶ月以内に新関諸島の主権が、龍刻連邦にあるという声明を出さなかった場合…宣戦布告させてもらう」

動揺が走る会議室。

ヴァルマーレ海軍大臣

「図に乗るなよ、龍に見初められた女狐が！我らの心は、大陸の猿共の小さな心よりも大きいのだ！」

蘆田

「まあ待て。…龍姫公、新関諸島を狙う理由は、そこに埋まっている地下資源だな？

確かにあそこには魚などの食糧資源だけではなく、鉄やボーキサイトをはじめとした鉱山資源が豊富にある。なんなら、燃料資源さえも。

だが、その目…あくまでも、我々の国力を削るための方策と見た」

龍姫公

「…話が分かる奴は好きだよ。…それで？国力を削られたくなければ、大人しく私達の要求を呑むのが筋だと思うのだけれど？」

蘆田

「この世に、戦争ばかりを望む狂人は早々いない。

開戦をしようとする意図が汲めないのだよ、龍姫公。

何故我々と争う必要がある」

…ここからの会話は、あまり汲み取ることができなかった。だがそこに、彼女の『底知れぬ悪意』があることだけは分かった。

龍姫公の野望

龍姫公

「…そんなことから、交渉は決裂。2週間後に宣戦布告という話だったんだが…軍部が開戦を嫌がって、なんだかんだで3ヶ月経ってしまったわけだ」

そう言葉を紡ぐ彼女だったが、すぐに君達に目を向け、その様子を見て察したかのように語気を荒げる。

龍姫公

「お前達…私の『過去』を視たな？故意であろうがなかろうが、お前達は『犯してはいけない罪』を犯した。国の長たるものとして、お前達の功罪は裁かねばならない」

と言い、彼女は君達に大剣の刃を向ける。

龍姫公

「お前が犯した罪を是とするならば…私を倒してみせろ」

敵：龍姫公

GM メモ：龍姫公（第 1 戦）タイムライン

毎ラウンドの永続効果（確定ダメージ）は常時発動

1 ラウンド目：【悪意の針】【属性付加】《牽制攻撃Ⅲ》《魔力撃》《マルチアクション》[近接攻撃]【破滅の槍】

2 ラウンド目：【悪意の針】【魔力増強】【属性付加】《牽制攻撃Ⅲ》《全力攻撃Ⅲ》《マルチアクション》[近接攻撃]【破滅の槍】

3 ラウンド目：【悪意の針】【魔力増強】【属性付加】《魔力撃》《全力攻撃Ⅲ》《マルチアクション》[近接攻撃]【破滅の槍】

4 ラウンド目：【悪意の針】【魔力増強】【属性付加】《魔力撃》《全力攻撃Ⅲ》《マルチアクション》[近接攻撃]【破滅の槍】

5 ラウンド目：【悪意の針】【魔力増強】【属性付加】【瞬間修復】《牽制攻撃Ⅲ》《ビハインドキャスト》《マルチアクション》[近接攻撃][**閻喰龍の牙**]【破滅の槍】

6 ラウンド目（戦闘終了）：【悪意の針】【魔力増強】【属性付加】【瞬間修復】《牽制攻撃Ⅲ》《魔力撃》《全力攻撃Ⅲ》[近接攻撃][**閻喰龍の牙：イベント**]

6 ラウンド目 / 「閻喰龍の牙**」効果処理時：無慈悲な挑発**

龍姫公

「私に手傷を負わせられないとはな。ならばこれで終いとしよう…。

——秘技・晴天大征」

彼女の詠唱の直後、君達は臓物を切り裂かれるような感覚を味わい地に伏せる。
意地で立ち上がる君達を見て、不服そうに龍姫公は話し始める。

龍姫公

「そもそも私は、お前達のような存在を…『クリスタルの加護を持つ光の戦士』と言う者達を信頼していない。信頼する必要性もない。まして、その存在は、人ならざる唾棄すべき物体であり、排斥するべき代物。奴等にも人権など与えてはならないと、私はそう考えている。

だが、お前達は違うのだろう。光の戦士だとしても、人として生きることには疑念を抱いていない」

アルテマ

『待て、龍姫公。そもそも、星の意志が与えた光の加護を、お前は否定するというのか？
…それは駄目だろう。同じ名を持つミュートスも、それは望まないはずだ！だということに何故、お前は彼女が望む未来を否定する！』

アルテマが、怒りの眼差しで龍姫公を見る。

龍姫公が剣を構え、再び「晴天大征」を放とうとする。

抵抗不可。回避不可。防御不可。ただ地面から湧き上がる、光の戦士に対する憎悪という闇が、君達を殺そうとしている。そんなときだった。

聞き慣れた竜の咆哮が轟く。ふと空を見上げると、そこには宙準星の竜がいた。

龍姫公

「コズミック・キューサー・ドラゴン…！？何故こんなところに…！」

宙準星の竜が吼える。

湧き出かけた闇が唐突に鳴りを潜め、宙準星の竜が殴りかかろうとする。

龍姫公

「だが…甘い」

しかし、先ほど君達に撃とうとした一撃を、宙準星の竜に撃ち込むことで払いのける。

その瞬間、君達はその想定を上回る結末に誘われることになった。

宙準星の竜が弾き飛ばされた先から、少女が降ってきたのだ。

しかも、その姿はエクセリアではない。

?????

「私の依頼を受けた者がいると聞いたから、暗魂の暁に行ったけれど…、肝心の冒険者がギルド内にいなかったからここまで歩いてくる羽目になった…。

君達が、『暗魂の暁の冒険者』だね？」

(※GMメモ：RP待機)

イリヤ

「ご名答。私が、イリヤスフィール・ゼーゲブレヒトだよ。

さて…説明してもらおうかな、龍姫公。何故『彼ら』を斬った？」

龍姫公

「彼らは国是に反する外患だ。『超える力』を持ち、クリスタルの加護を受けた『光の戦士』だ。龍刻連邦が、『光の戦士』を見つけては、彼らの控訴すら認めずに死刑にしているのは、イリヤスフィール、君も知っているだろう？何故《暗魂の暁》に所属している冒険者を検挙しない？」

(※GMメモ：RP待機)

イリヤ

「要するに、あなたは…『超える力を持つ者』に人権はないと、言いたいんだね。

なるほど、エクセリアさんが残した情報通りだ。

あなた、裏でアイザックとかいう奴と関わっていない？あなたは、この国に住まう全ての人にとって、不都合となることをしているんだよ？」

龍姫公

「…仮にそんな奴と関わっていたところでどうなる。私は、ヴァルマーレが権益を主張している領土を取り返したいだけだ。そしてそこに、『光の戦士』や『英雄』、『エース』などといった『<ruby>例外<rt>イレギュラー</ruby>』は必要ない。

それとも、ここで私の首を刎ねるか？私達でもどうしようもない、『最終戦争』の引き金になると知っているだろうに」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・ お前のやっていることはただの選別だ
- ・ 決着をつけよう、龍姫公

龍姫公

「…どうやら、やる気のような。ならば、私はお前達に与えよう。『終わることのない闘争だけが支配する世界』という名の絶望を！」

?????

「ちょっと待ちな。君達が戦うのは今じゃない」

そこへ、黒い影が現れる。

黒ずくめの非金属の鎧に、黒と蒼の双剣を背負った、14 歳ほどの少年と思しい影。

龍姫公

「お前は…『祝福無き者』か！？」

黒の剣士

「へえ。君達はそう呼んでるんだ。僕は黒の剣士。同胞からはそう呼ばれている。
それで、まだ倒さないの？アレ」

黒の剣士はうざそうに、滞空するコズミック・キューサー・ドラゴンを指さす。

黒の剣士

「僕が倒してもいいよ？
ただその代わり、君達が持っている祝福のすべてをいただくけどね」

(※GMメモ：RP 待機)

黒の剣士

「怒っちゃった？まあいいや、アレは僕が倒す。君達は剣の加護とマナを渡せばいい。
それで、『僕達の世界』は新生を果たす。救われるんだよ。その肉の裡にある魂も、元の世界にもどるだけ。観測者は、新生を果たした『僕達の世界』に視座を移し、この世界は『不要なもの』として演算を終わらせて、剪定される」
「それが嫌なら、僕より先に宙を照らす大穴を討ち倒してみせてよ」
「僕が伝えるべきことは伝え終わった。君達が真実に辿り着くことを願ってるよ」

そう言って、黒の剣士は闇に消えていくだろう。

イリヤ

「…だそうだけど、あなた、世界には終わって欲しくないでしょ？」

龍姫公

「何を言っているんだ？ヴァルマーレと決着をつけることができるなら、奴にエクセリアを殺させるさ」

(※GMメモ：RP待機)

イリヤ

「…獅子身中の虫、ってやつか。…龍姫公、あなたを外患誘致罪で訴えます。

あなたが作った法で、あなたを提訴する。そうでもしないと、あなたはヴァルマーレとの最終戦争を完遂するまで止まらないでしょう？」

数回、時計の針が動くぐらいの刻が流れて。

龍姫公

「いいだろう。そこまでするなら、宙準星の竜をなんとかしてみせろ。本当にそれが、お前達にできるのであれば。依然として、光の戦士のようなイレギュラーは認めていない。

…その加護も抜きにして戦うといい」

ただ冷酷に、譲歩の条件を、彼女は君達に突きつけた。

その直後、君達は異形の咆哮を聞くことになる。

イリヤ

「…どうやら、『宝瓶の褪せ人』のお出ましのようだね」

そこに現れたのは…小壺を被っただけの全裸の男だった。いや小壺と下着を着ているから狭義の全裸ではないのだが。

敵：“知啓の水瓶”アルトゥール・フォン・バイエルン

宝瓶を制して

君達はアルトウールを制した。

アルトウール

「…フ…フフフ…」

(※GMメモ：RP待機)

アルトウールは嗤う。

君達は、その身に悪寒を感じるだろう。

アルトウール

「貴様らは…確かに『超える力』を使わずに俺を退けてみせた。

だがな…貴様らには分かるまい。

最強の『祝福無き者』が、貴様らを狙っているということに！」

その言葉の直後、周囲に激震が走る。

その根源は…君達にとって、見たくもない存在だった。

(※GMメモ：BGM「*To Sail Forbidden Seas*」)

エクセリア

『…ふざけた話に乗っても乗られるな、ということなんだがな。

そのクソゲーミテ一な恰好の男の言うとおりに、私は祝福を得ながらも祝福無き者としての権能を有している。…お前達のすっからかんな脳みそでは、喩え世界から「始まりの剣」を奪ったとしても意味はないと、気付かないようだがな』

…転身しっぱなしではあるが、以前よりは明瞭な意識を持った状態のエクセリア。

しかし、その眼差しからは敵意を感じることができた。

エクセリア

『私は巡り続ける星々を纏める者。

あるときは火のない灰として、終わらぬ命を以て終わらぬ旅路を歩み続ける者。

あるときは命の限り歩み、地上の星々を繋がんとした、友に親愛を寄せられた者。

そしてあるときは…斯様なように、弟子に対する最大級の試練として立ちはだかる者。
「祝福無き者」の末席、星を照らす恒星の座に在りし者、それが私の一側面だ』

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

『分かっているさ。お前達は、私でさえ捉えて飛び越えていくつもりなのだろう？

祝福無き者だって、己の世界を剪定から救おうと努力して…、その結果行き着いた「こたえ」が侵略だった。ただそれだけだ。そして、彼らを苦しめる元凶が、他ならぬ私にあるのも、『星の記録』を取り続ける私だからこそ分かること。

故に、君達に試練を課す。『アイザックが計画に用いる材料のひとつの「ミュトス」である私を退ける』という、とても単純な試練をね』

『…アルトゥール。できているんだろうな？』

アルトゥール

「勿論ですよ、アゼム様」

エクセリア

『ならば結構。さあ、私の旅路を辿って来るといい』

コンテンツ解放：魂魄鳴動 スターダスト・イルミネイト

※シナリオはここで終了です。

報酬

経験点

・基本：4500 点

資金

・基本：5000G

名誉点

・なし

成長回数

・基本：11 回

